

り 理のないところに道はひらけない

私の現役時代から合意形成が難航しているケースの相談がくることが多かった。まちづくりを仕事とする事務所が数ある中で、私どものような小規模の事務所にお声がけいただけるのはたいへんありがたいことである。当然、私たちもできる限り良い方向に動くように知恵を絞る。結果、「このようなケースでこんなに気持ちよく仕事ができただのは初めてだ」とか、「また機会があればご一緒したい」などの声をいただくことも、一度や二度ではなかった。

合意形成が難航している場合、情報の不足とそれに伴う不信感が背景にある場合が多い。情報の不足を補う際に留意しなければならないのは、こちらが何を伝えたいかということを考えるのも大切だが、相手が何を知りたがっているのか、どこに引掛かりがあるのかを把握することも重要だと思っっている。必要な情報を伝えていても、相手の知りたいポイントを踏まえて情報を整理しわかりやすく伝えなければ届かないことがある。そのポイントを相手から直接指摘される場合は少なく、当人もポイントを的確に指摘できるまで状況整理ができていない場合も多い。それを補うかたちで伝えるべき情報は何かということを明確にしていくのが、まちづくりプランナーとしての経験と想像力だと思う。そのためには気軽に話を聞ける場が有効であり、その場のコーディネーターもまちづくりプランナーの重要な役割になる。的確な情報をつうじて状況が理解できれば不信感も和らぐ。理解できないもどかしさが不信感につながることは結構あるのだ。

ただ問題は、クライアントが考える合意形成の方向自体が、その地域に受け入れがたい場合にどう対処するかだ。あくまでクライアントが考える合意形成の方向の代弁者に徹するという選択は、仕事としてとらえれば当然である。が、それではことが進まない。勇気があることなのだが、どうしても受け入れがたい点があれば、それを踏まえて合意形成の方向を柔軟に見直す提案をするのも、まちづくりプランナーとしては必要なことだと思ふ。まちづくりの道は複雑で一つに限られるわけではない。むしろ柔軟に見直すことよって、より良い方向性を見つけることも多くある。

やはり「理のないところに道はひらけない」と思うのだ。